



令和4年5月 26日  
佛教大学附属幼稚園

「仏教保育 6月のねらい」

生命尊重

「虫の眼と鳥の眼」

園長 佐藤和順

附属幼稚園の周りの木々も緑を増し、雑草も雨が降るたびに根強く伸びているように感じます。園児も園生活に慣れ、雨が降らなければ外で、雨が降っていれば室内で元気いっぱい活動しています。

さて今月の保育目標は「生命尊重(せいめいそんちょう)生きものを大切にしよう」です。自分の生命を大切にすることと同様に、他の人間および人間以外のすべての生物の生命を大切にすることは、幼児の情操に大きな影響を及ぼすことです。各自で充分心がけたいものです。

生物には多様な特性・特徴があります。この季節、園庭の隅では、だんご虫やアリ、いろいろな虫を探している子どもの姿が見られます。捕まえた虫は観察ケースに入れ、図鑑で調べ、特徴を学んでいたります。

物事を見るには虫の眼と鳥の眼が必要だといわれます。虫の眼とは、地面を這って歩くように小さな変化も見逃さないきめ細やかな観察眼のこと。これに対して鳥の眼とは、大空から地上を見下ろすように、俯瞰的に大局をとらえる眼のことを指しています。これは、子育てにも通じることだと思います。保護者であれば、いつでも我が子の変化を敏感に感じ取りながら過ごされていることと思います。何となく元気がなく、調べると熱があったということは誰もが経験していることでしょう。幼稚園で子どもは、いろいろな経験をします。時には友達とけんかしたり、先生から注意されることもあるでしょう。自分の非は言えないまま、一方的に「〇〇ちゃんから意地悪された」「〇〇先生から叱られた」と話すこともあるかもしれません。子どもの言い分に寄り添い話を聞くことは大切なことです。しかし、それを鵜呑みにするのではなく、鳥が空から見下ろすように、俯瞰的に事実を確認し、客観的に対処する余裕が欲しいものです。「泣いたカラスがもう笑う」というように、子どもの世界は流動的です。さっきまでけんかしていた相手と仲良く遊んだりということも少なくありません。「少し様子を見る」「大局的に判断する」という態度も、子育てには必要です。

生物が活動的になるこの時期、生物やその行動の多様性を確認するとともに、時代の流れを読む魚の眼、逆さまになって視点を変えてみるコウモリの眼など、いろいろな眼を持ち合わせれば、一層、子育てを楽しむことができると思います。

